

4 漢方医学の基本概念

はじめに

漢方医学における人体の把握は、古代中国人の自然観にもとづいたものである。彼らは、人間は宇宙の一部であり、自然界と無関係に存在することはできないし、同時に人体の各部は有機的に繋がっており、一部のみを取り出してその機能を論ずることはできず、身体の中の部分もまた精神も、常に全体との関連をもって存在していると考えていた。つまり、漢方医学はコスモロジー（宇宙論）の上に構築され、体系づけられ、成立した医学であるということができる。

人間が宇宙の一部である以上、人体の諸現象も宇宙の法則によって説明される。漢方医学における人体の認識・疾病の把握・治療などは、すべてこの法則を借りて行われる。あまねく宇宙に存在し、人体にもあって生命活動を行う根源となっているのは「気」である。

気は概念は広範であり、宇宙や人体を構成する基本的な要素として、また、すべての事物や事象の根源的な要素として認識されている。『莊子』北遊篇に「人の生は気の聚りなり。聚れば生と為り、散ずれば死と為る」と述べられているように、人体において、気は生命の根源である。

気はもともと一元のものであるが、その働きによりさまざまな種類が区別され、人体内では一定の法則のもとに生成・循環・代謝され、諸器官の機能を発揮させている。これらについては第5章「漢方生理学」で述べる（p.62参照）。

宇宙も人体も包括して説明する理論は、陰陽五行説と呼ばれるものである。以下に、漢方医学理論の基礎をなす概念である「陰陽五行説」について概説する。

陰陽五行説

陰陽五行説は、医学のみならず、中国哲学の根幹をなす理論であり、自然界の各種の現象は、すべてこの理論により解釈される（天文・暦算・地理・農業・医学など、自然科学、社会科学の根本原理として用いられてきた）。この理論は、陰陽説と五行説の二つよりなる。陰陽説と五行説は、相互に関連をもっているが、元来、その発生を異にする別個の考え方であり、次第に融合が試みられて、戦国時代末期に鄒衍らによってほぼその原型が整えられた。

以後、医学の領域においてもさらに発展し、生理学・病理学・診断学・治療学・薬物学など、すべての分野に応用されるようになった。

1 陰陽説

陰陽とは、もともと日かげと日なたの意味であったが、のちに天地間の万物を創り出す気をいうようになった（天地・日月・暖寒・男女のように相対する気。表1参照）。陰陽学説によれば、宇宙に存在するすべての事物は陰か陽かの属性をもち、どのような事物の内部にも陰と陽の二面があるとされる。この陰陽論は、

表1 事物の陰陽の属性の例：自然界

分類	空間	時間	季節	温度	重量	明るさ	動き
陽	天	昼	春・夏	熱	軽	明	運動
陰	地	夜	秋・冬	寒	重	暗	静止

絶対的な対立を示す二元論ではなく、相互に依存し、相互に制約し、あるいは相互に転化しうる関係にある。

2 五行説

五行とは、天地の間に広がり、めぐり動いて、やむことのない五つの元素（木・火・土・金・水）を指す。これらの五つの元素は「五材」と称されるが、これらが一定の法則に従って動き、互いに影響を与え、変化するときにはじめて「五行」の名が与えられる。五行の動きと変化は、「相生」「相克」の二型に分けられる。

相生とは、五行の各要素が、一定の順序に従って次に来る要素を助長する状態をいい（図1）、相克とは、やはりある一定の順序に従って別の要素を制御することである（図2）。

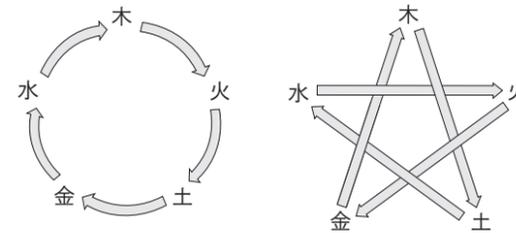


図1 五行の相生関係

図2 五行の相克関係

五行の各要素は、自然界のさまざまな事象に対応し、同じように人体のさまざまな要素に対応する（表2）。

五行にはそれぞれの特性があり、宇宙や人体の事象もそれに倣って説明される。五行の特性については、『尚書』洪範に、「水は潤下*1を曰い、火は炎上*2を曰い、木は曲直*3を曰い、金は従革*4を曰い、土は麦に稼穡*5す」と述べられており、現在の用法はこれを敷衍したものである。

陰陽五行学説とは、この両者を組み合わせて、自然界や社会の各種の現象を説明するものである。

- *1 潤下：流れ潤す
- *2 炎上：燃えあがる
- *3 曲直：曲がったりまっすぐになったりする
- *4 従革：加工して形が変わる
- *5 稼穡：穀物を採って収穫する

表2 自然界と人体の五行分類

五行	木	火	土	金	水	
自然界	五季	春	夏	長夏	秋	冬
	五能	生	長	化	収	蔵
	五気	風	暑	湿	燥	寒
	五色	青	赤	黄	白	黒
	五味	酸	苦	甘	辛	鹹
	五方	東	南	中央	西	北
	時間	平旦	日中	日西	日入	夜半
人体	五音	角	徵	宮	商	羽
	五臓	肝	心	脾	肺	腎
	五腑	胆	小腸	胃	大腸	膀胱
	五官	目	舌	口	鼻	耳
	五主	筋	血脈	肌肉	皮毛	骨髓
	五志	怒	喜	思	憂	恐
	五声	呼	笑	歌	哭	呻
五変	握	憂	噦	咳	慄	

陰陽五行説の医学への応用

漢方医学では、人体のさまざまな組織・器官の機能や代謝を、気・血・津液などの基本精微物質、および臓腑・経絡の機能に帰納して考えている。人体は、これらの働きを通じて、統一体としての生命活動やさまざまな機能を維持する。

1 陰陽説の医学への応用

陰陽の概念はさまざまな形で用いられるが、主として次の二つの観点に整理される。

一つは、すべての事物や事象を陰陽によって分類するもので、たとえば、病証を陰証・陽証に分け、病位によって表裏に分け、寒性熱性の程度によって寒熱に分け、正気と邪気の関係によって虚実に分けるなどはその例である。ここに述べた陰陽・表裏・寒熱・虚実の八つの要素は「八綱」とも呼ばれ、漢方医学の基礎をなす概念である。